

留学先国名 : ニュージーランド

留学先学校名 : オタゴ大学

留学期間 : 平成 27 年 4 月 28 日 ~ 平成 28 年 2 月 12 日

ニュージーランド南島のダニーデンで 4 月 20 日より約 10 ヶ月の留学生活を送りました。留学以前には英語に強い苦手意識を持っており、英語圏に留学するのを決めたのもそれを克服し将来の強みに変えようと考えたからでした。結果として現在は英語が好きとまではいなくても、苦手だと感じることはありません。これが私にとって一番の大きな変化だったと感じます。

ステイ先は 10 人以上の大家族でありスピーキングやリスニングの練習にはとても良い環境でした。週末は一緒に映画を見たりウォーキングトラックを散歩し野生のペンギンやオットセイを見学したりと、自然豊かなニュージーランドならではのアクティビティを満喫しました。一方で南極大陸に近いニュージーランドでは地球温暖化の影響が顕著に見て取れます。海岸線の浸食や豪雨時の床上浸水などを見るたび、産業のもたらすものを改めて考えさせられました。また観光学を専攻している私にとって旅行することも大きな学びでした。ニュージーランドは車社会であり特に南島では公共交通が発達していません。車を持っていないければ定期バスを利用するほかに、外国人観光客にとっては少し不便に感じる場所ではないかと思えます。しかし一つの会社が独占するツアーでしか行けない場所も多く、こういった制限を伴う付加価値がニュージーランド観光産業の特色であると感じました。また英語でのガイドツアーに参加したのもリスニング向上に役に立ちました。その理由は中国・韓国系旅行者は団体旅行が多く専用のガイドツアーがあり、それ以外は多くの場合英語話者団体と一緒にネイティブスピードの解説を受けるためです。さらに映画のロケ地をめぐるツアーは各地で多種多様に催行されていました。日本ではアニメの聖地巡礼で地方に観光客を呼び込むことがありますが、オリンピックで期待されるインバウンド誘致の際にも同様に活用できるのではないかと感じました。

オタゴ大学ランゲージセンターでは、タームごとに中級から上級クラスまで昇格しながら学びました。最初の頃はほかの学生の話すスピードや発言率の高さに圧倒され、なかなか話すことができずにいましたが、オプションクラスを TOEIC から IELTS に変更しスピーキングやライティングの練習をするうちに自分の意見を述べるできるようになっていきました。上級クラスではプレゼンテーションを行う機会が増えました。エキスポプロジェクトでは自分の専門外であった理系分野（インドアファーマーミング、糖尿病）について 20 分程度話し続けるというスピーキングの試験を行い、学期末に行ったプレゼンテーションでは鯨骨生物群集や石油の海上流出と政治の関係といったテーマについて発表しました。50 人ほどのオーディエンスがいる場所でプレゼンテーションを留学の集大成として行ったのですが、そこで評価をしていただけたことが自信となりました。

また遠隔履修という形で所属大学のゼミを履修していたので、留学期間中に日本のゼミ生と同じように二万字程度の論文を提出する必要がありました。英文の新聞記事や論文を探し何本も読み込むことは

専門用語や文語的な表現を習得するよい機会でしたが、それ以上にどの情報をどのような表現で世に送り出すかという報道視点の違いと共に文章を読んだ経験は、今後卒業論文を完成させていくうえで活かせると考えています。

これは持論ですが経験というものは誰の意見も参考になり、誰の意見も参考になりません。誰一人として同じように生活するわけではないのでとにかく各々やりたいことを納得のいくように選択することが一番だと考えています。私は留学準備として一番重要なことは英語の基礎や応用を訓練することだとは考えていません。もちろん英語力を事前にある程度高めることは必要ですが、それ以上に日常的に様々な分野に興味関心を持ち、自分の意見として思考することが最も大事なことだと考えています。私の場合はよく議論に上がる捕鯨問題や難民等、国際情勢や日本文化といった質問に対する返答に困ることはなかったのですが、宇宙人に何を質問してみたいかという質問や、今までで一番うれしかったプレゼントについてといったような質問には考え込んでしまうことが多く、課題でした。また自分の考えを簡単な英語に置き換える練習も重要です。ディスカッションでは自分が知っている単語を相手も知っているとは限らず、多彩な言葉に言い換える必要がありました。また極力日本語を話さない環境をつくるという意見には私は賛同しません。日本語も同じ言語ですから使わなければ劣化していきます。海外の大学に進学しない学生は帰国後の卒業論文を日本語で書く場合がありますが、日本語を使わないでいると日本語運用力が著しく低下してしまいます。一人で暮らさない限りは学校でも家庭でも英語を話す時間が十分に用意されているので無理に日本語を制限する必要はないと感じます。

私にとって海外の大学で言語を学ぶのはこれが2度目になりますが、教育現場で働きたいという気持ちが一層強まりました。以前留学したことのある韓国、今回のニュージーランドそして母国である日本、異なる授業方法にはそれぞれ長所短所があり、いつも自分が教員になったらこの方法を使ってみたいと思いながら授業を受けていました。学習効率を伸ばすためには何よりも学ぶことが楽しいと感じることが大事だと私は考えます。海外でも学んだ、生徒の興味を引き出すような授業を私も作っていきたいと考えています。また韓国では実生活に基づいた韓国語指導を、ニュージーランドでは様々な学問分野に派生した英語指導を行っていましたが言語の枠を飛び越えて多様なジャンルと結びついた授業を展開することも、生徒の個性や興味を引き出しつつ実用的な言語力を指導するには重要だと感じました。

最後に私を応援し支えてくれた家族、大学の皆様ならびにおおさかグローバル奨学金に多くのご支援をいただき、一年間の留学を終えることができたことを感謝します。留学は多くの経験や知識を得る機会となりますが、費用は決して簡単に捻出できるものではありません。そんななか経済的支援とともに新たな学びの場を与えてくださった皆様に心より感謝します。本当にありがとうございました。